

地方衰退地場産業にみる産地変容の諸条件 ——熊本県城北地方の和紙産地の事例——

山 中 進*

I は じ め に

九州各地には、今でも陶磁器や織物、和紙、木・竹製品など、地方地場産業の中心をなす伝統的産業が数多く存在している。しかし、これらの産地は、概して規模も小さく、全般的に衰退の傾向にあるものが多い。ここにとりあげた和紙業も、その代表的なものの一つで、衰退・残存している産地よりも、衰退・消滅してしまった産地の方が多いことから、地方消滅地場産業と呼んだ方が良いかも知れない。

伝統的な和紙業は、明治期に資本主義的近代工業の勃興によって、大きな画期を迎えることになる。それでも、多くの手漉和紙は日露戦争(1904～1905)前後まで、製造戸数の増加で量的に生産を伸ばし、高知、愛媛、岐阜、福岡、福井、島根、鹿児島、東京、静岡、埼玉などの主要産地は著しく発展している¹⁾。また、その一方で藩の統制下で展開してきた紙漉産地のなかには、明治維新(1868年)以後、営業の自由化や価格競争の激化という事態に直面し、新たな時代への体制を十分にとれないまま衰退していったところも多い。養蚕業の発展も、産地の衰退に拍車をかけるものであった。

しかし、この時期の和紙業の消長や産地の変容は、どの地域でも一様に推移したわけではなかった。大脇保彦は²⁾、まだ和紙業が盛んであった明治期を中心に、生産戸数・生産額からその推移を考察している。その内容は、(1)戸数の減少、生産額の増加がともに大きいもの、(2)生産額、戸数ともに大き

な増加をするもの、(3)生産額、戸数ともに増加するが、増加が小さいもの、(4)戸数の変化は少なく、生産額を大きく増加させるもの、(5)戸数の減少は大きく、生産額の増加の小さい傾向が強いことなどで、これが地域分布のうえにもよく表現されていることが予察されるとしている。

これによると、九州の和紙産地のなかでも、福岡は(4)のタイプに属し、宮崎、鹿児島、長崎、熊本、大分は(3)に属している。筑後の和紙産地を有する福岡は、伝統工業、農村家内工業的なものから、1戸当たり平均生産額も最大で、企業性が大きい都市近郊型の和紙業へ変化をみつつあるとして、福井、香川、山梨、埼玉、兵庫と同じ傾向の産地として把握されている。また、(3)のタイプでも、宮崎、鹿児島、長崎は、鳥取、茨城、群馬、京都、愛知などと同じ戸数当たりの生産額の比較的大きな(a)のタイプに細分され、熊本、大分は富山、徳島、新潟、奈良、和歌山をはじめ、福島、宮城、山形、岩手などの東北産紙県の属する(b)に属している。こうしてみると、国土の縁辺に位置する東北・九州の産紙県の多くが、この時期に大きな発達をみておらず、地方和紙産地に共通する性格や構造の一側面をものがたっているともいえる。そこで、ここでは著しい発展をみないまま衰退した熊本県の和紙産地をとりあげ、産地の成立・展開と、その後の変容の過程を検討することで、産地衰退の諸条件について考えていくことにした。なお、『熊本県統計書』からは、1901年(明治34)から、和紙製造戸数の年次的変化を追うことができ

* 熊本大学教養部

るが、これによるとわずかばかりの増減はみられても、傾向としては年々減少していつている。

これまで、和紙業に関する研究は、その発達や変遷³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾、産地の変貌や展開など⁷⁾⁸⁾、地理学の分野に限らず多くの領域から、多角的にとりあげられてきた。このうち、産地の変貌や形成について論じたものの多くは、規模も大きく全国的にも著名な発展産地を対象とする傾向にあった。地方の小さな和紙業地域をとりあげ、その衰退・消滅の原因について考察したものはきわめて少ない⁹⁾。近年、地方の振興が声高に叫ばれているおり、衰退・消滅した産地をとりあげ、そこが何故衰退していったのか、その要因や背景について考察してみるのも意義あるものと考ええる。

ここでとりあげたのは、全国的にはそれ程知られていない、熊本県北部の玉名・鹿本（旧山鹿・山本郡）・菊池の3郡が位置する城北地方の和紙産地である。それでもこの地方の和紙業は、成立の歴史も古く、第2次大戦前まで、県下で最も多くの製造戸数を有し、地域の人々にとっては重要な生業の一つであった。また、この地方の北部は、福岡県の筑後和紙の産地に接しており、矢部川流域の農村を筑後和紙業の核心地としたならば、熊本県の城北地方は、その周辺部を構成することになる。その意味で、多分に他律的な諸条件に支配されて産地の変容をみたともいえる。そこで、ここでは筑後和紙産地との比較やかかわりを考慮しながら、和紙産地から原料産地へと変容をとげた明治期を中心に論をすすめることにした。

II 和紙業の成立と産地の性格

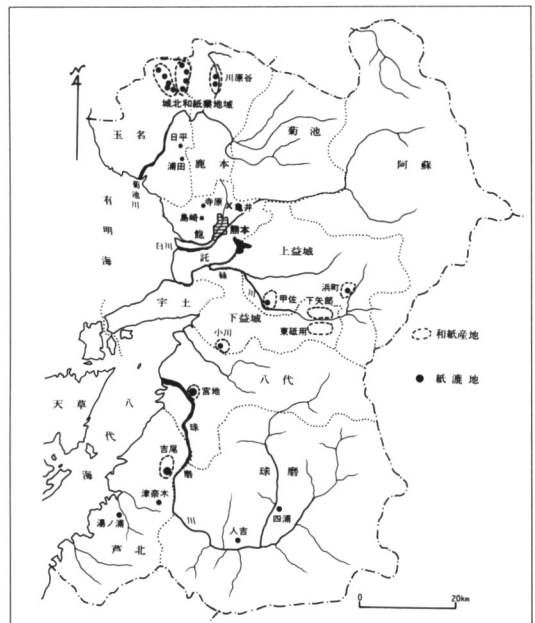
1 熊本県の和紙業

熊本県で、藩政期から明治期までに成立した、主な紙業地を概観してみると、北部の玉名・鹿本郡を中心とした地域や中部の緑川流域に位置する上益城・下益城郡、それに南の方では八代郡や芦北郡、

人吉・球磨地方など、県内各地に広くみられる（第1図）。これらのうち、成立した時期が古く、紙漉きが地域の重要な生業としてだけでなく、主要産地としての地位を維持し続けてきたのは、城北と八代の2つの地域である。

城北地方の和紙業は、1598年（慶長3）、加藤清正が高麗より道慶・慶春2人の紙漉工を召し連れ、製紙に従事させたのが始まりとされている。彼らは当初、飽託郡亀井村（現熊本市）に居住し、紙漉きを始めるが、この地は水も悪く、薪にも不自由したので、1615年（元和元）に、道慶が玉名郡上小葉村浦田（現玉名郡玉東町）へ、慶春らは1619年（元和5）に芋生村川原谷（現鹿本郡鹿北町）に移住し、そのうちの一部の者は日平（現玉名郡菊水町）にも移り住み、それぞれ紙業に従事している。その後、彼らは細川氏の御用紙漉としても召し抱えられ、その技術は、城北地方の村々に広がったといわれる¹⁰⁾。

一方、八代地方の紙漉きは、越前式の抄紙技術を持った柳河藩御用漉師の矢部新左衛門が、八代郡



第1図 熊本県における紙業地域と和紙産地
（藩政期～明治期）

宮地（現八代市妙見町）で紙業を始めたのが起こりである。彼は、藩主立花宗茂が関ヶ原の役（1600年）の後、加藤清正に預けられた折、主君を慕って肥後に流寓している。清正の死後、大阪夏の陣の戦いで宗茂は徳川方に従って戦い、その功によって再び柳河城主になると、新左衛門は立花公に再任のため筑後に帰っている。しかし、その後肥後藩は、立花家に紙の漉手を所望し、彼の弟子三右衛門が招きにに応じている。彼は筑後の矢筈部家にちなみ矢壁姓を名乗って、紙漉きを継続している。細川忠興は1658年（万治元）に、矢壁を細川家の御用紙漉きとし、他に親類の下川孫兵衛、原四兵衛の2人もそれに加えている¹¹⁾。

ところで、和紙業の起源や成立当時の生産のあり方については、史料のうえでも、まだはっきりしない点が多くあり、今後の検討に待たなければならないが¹²⁾、こうした問題は別にして、浦田・川原谷・日平でおこなわれた城北地方の和紙業は、第1表に示したように、細川光尚の代（1641～1649）には早くも大奉書の生産が中止され、扶持も召し上げられている。また、1697年（元禄10）には川原谷の紙漉き一同が、先祖の覚書を藩主に差し出し、窮状を訴えている。城北地方で始められた朝鮮式の紙漉きは、50年足らずの間に一つの転機を迎え、とくに浦田・日平の紙漉村は、その後次第に衰退していったようである。『玉名郡内田手永風土記』¹³⁾（文化9年）には浦田村の紙漉きについて、「子孫之者今以紙職仕候得共零落ニ相成、当時ニ而ハ纔完紙出来仕候」との記述があり、文化年間（1804～1818）には零落していたことが分かる。日平村についても、「只今ハ紙漉宮候者無之」と書き記され、紙業が既に消滅している。

菊池川の下流近くの、小さな支流である木葉川に注ぐ浦田川、その上流にある浦田村は電数16軒、惣人数80人、高9石6斗7升（田7畝、畑3町4反4畝21歩）の小さな村である。恐らくこの頃には、紙の大量生産に対応できるだけの体制と生産基盤を持

ち得なかったことが、衰退の背景の一つではなかったか。日平村は電数65軒、惣人数242人、高324石5斗4升（田15町1反3畝21歩、畑11町7反1畝9歩）で、浦田より村落の規模は大きい。ここの菊池川に注ぐ江田川の支流の日平川沿いにあるが、谷筋は広く、谷奥までよく開かれている。「此村田畑釣合居、山多薪・かしき弁利能、跡作ハ麦を作申候」と記録されていることから、生計を紙漉きに頼る以上に、新たな農業の展開がみられたか、あるいは他の生業・余業に生活の基盤を移していったかのいずれかで、紙業は消滅したものと考ええる。いずれにせよ、この辺りの状況は詳しく分らないが、文化年間頃となると、浦田や日平のような菊池川の下流に近い小さな支流沿いの地域では、十分な原料の供給も期待できないし、生業としての紙漉きは、次第に姿を消していく方向にあったことだけは明らかである。

肥後藩は、1637（寛永14）年には楮の栽培を奨励し、楮から収入を得ている。藩政時代の楮皮の生産量や地域ごとの状況をあらわす史料は、今のところなく詳しくは分らないが¹⁴⁾、藩による紙楮の生産拡大策で、城北地方北部の山間地は、楮の栽培と併せて、和紙業の展開がすすんでいったことがうかがえる。とくに、和仁川・十町川・岩野川の流域は、それぞれに和紙業の中心を形成し、城北の和紙産地をつくりあげていったといえよう。

他方、八代地方の和紙業は、1772年（安永元）に24代木村喜三次政実が、大高檀紙をはじめ各種の高級紙を漉き出してから、「宮地紙」として世に広く知られるようになった。これによって細川家は、各種の「宮地紙」を幕府に献上している¹⁵⁾。「宮地紙」の秀れた抄紙技術・技法の集積は、1772年以降数多くの御用紙漉の存在によっても知ることができる。土佐藩、肥後藩、柳河藩には、藩主のためにいわゆる「お留紙」^{とめがみ}を調達する紙漉工が存在し、特殊な権益を与えられて抄紙に専念するため、異色ある紙を漉き出したといわれる¹⁶⁾。高度な抄紙技術を持った紙漉

第1表 熊本の近世和紙年表

時代		細川家 歴代藩主	事 項
西暦	和暦		
1598	慶長3	加藤清正	加藤清正、高麗より道慶・慶春を召連れ御紙漉役を仰付ける（御紙漉役、都合11人、2人扶持に3石宛拝領、1人に付1ヶ年に杉原大小束に付紙数300枚切、13束漉き上げを命ず）
1600	〃 5	小西行長	八代郡宮地で矢筈部新左衛門紙漉きを始める
1608	〃 13	清正	「慶春、源太郎、道間、市六、弥五介、三郎、源介、金右衛門、市次郎、女房老人、此拾人ハ皆希スキ也」（慶長13年飽田郡亀井村検地帳）
1615	元和元	加藤忠広	道慶、上水葉村浦田に移り紙漉きを行なう（木本家先祖附）
1619	〃 5	〃	慶春、芋生川原谷で紙漉き5人を召連れ居住、内3人は日平村に移り紙漉きを行なう（早野家先祖寛書）
1632	寛永9	忠利	幕府、熊本城主加藤忠広を改易、細川忠利小倉より肥後に入国、その父細川忠興（三斎公）八代に入城
1633	〃 10	〃	慶春、藤佐衛門、市左衛門、弥兵衛、与太郎の5名御用紙漉きに召抱えられる（寛永10年「被遺留之事」、早野家文書）
1637	〃 14	〃	紙を漉く草（楮）の栽培を奨励する
1645	正保2	光尚	玉名郡紙漉き孫兵衛、市丞、市右衛門、少右衛門、市次郎の5名、2人扶持3石を与えられる（正保2年「御扶持方御切米御帳」）
1658	万治元	網利	玉名郡紙漉き、細川光尚の代（1641～1649）に大奉書製造の中止により御扶持召上げられる
1671	寛文11	〃	細川忠興、矢壁新左衛門、下川孫兵衛、原田郎兵衛を御用紙漉きとする
1697	元禄10	〃	紙不自由につき国中の楮を他所へ売出さざる様に達す
1702	〃 15	〃	川原谷御紙漉先祖の賞書（早野家文書）
1709	宝永6	〃	御領内之紙不残紙座にて受込
1710	〃 7	〃	紙并楮弥以他所之者一切売渡申敷旨之事（永青文庫「触状扣頭書」）
1718	享保3	宣紀	紙楮輸出の禁に違反者あり罰則を出す
1746	延享3	宗孝	紙楮方を廃し、楮方役所とす
1751	宝暦元	重賢	領内之紙・楮の他所売出重ねて停止
1752	〃 2	〃	楮苗を渡し6分召上げ、4分を作徳とす
1753	〃 3	〃	八代紙漉、毎年貢楮を渡され、漉立上納していたが、勝手な改方で不都合もあり、今後高田手永官地村紙漉九兵衛、次衛門両名の責任者として諸事項を取計わせる
1759	〃 9	〃	紙の他出禁止、紙楮の他所売りを禁ず
1760	〃 10	〃	路傍、河川、宅地等に楮・楮を植えさす
1766	明和3	〃	紙楮1ヶ年出来高、楮上納高、売買之儀、紙漉人数、漉立之所の紙船板の様子等の事
1768	〃 5	〃	砥用手永福良村、栗津留村の者共、楮方御用の半紙の漉方を願出る 馬見原町の者、下紙を漉き商売したく願出る 矢部手永猿渡村に栽培の黒皮楮上納の願いを許す
1770	〃 7	〃	年貢楮を除く御買上楮の値段を値上げする
1771	〃 8	〃	大坂より楮苗1万本取寄せ植付けを奨励する
1772	安永元	〃	24代木村喜三次政実、越前岡本村を訪ね、大高楮紙、その他高級紙を漉出す 松井家推薦により、宮田、伊藤、木村、西、山口、坂口の7戸、新たに御用紙漉きとなる
1774	〃 3	〃	細川家、各種の宮地紙を幕府に献上。宮地紙の名が高まる
1778	安永7	〃	半右衛門外一名、前々通御用紙漉方の許可申請（八代宮地村）
1779	〃 8	〃	領内の漉紙はすべて差出すことになる
1792	寛政4	斉茲	紙楮商売仕法を定む。紙楮他所に出すこと前々通り禁止 山鹿南関に紙楮問屋建つ
1794	〃 6	〃	球磨紙楮他所売出差留られる。球磨郡御領紙楮商売の儀についての達
1804	文化元	〃	八代宮地村宮田善助、御用紙漉方を仰付られる 木村喜三次、高級紙抄出に成功し有栖川宮家から賞賛の榮譽を受ける
1806	〃 3	〃	矢賀部新右衛門持参先祖由緒書扣 御紙漉代を相統一式諸扣（西家文書）
1812	〃 9	斉樹	玉名郡浦田村紙漉き、「子孫者今以紙職仕候得共零落ニ相成」（「玉名郡内田手永風土記」） 日平村、「只今ハ紙漉宮候者無之」（「玉名郡内田手永風土記」）
1819	文政2	〃	内田手永村々の内仕立楮、半分村方へ渡され半分は代銭上納仰付られる
1821	〃 4	〃	内田手永村之御山空地等に植付けの郡方仕立楮は、半分は村方へ、残りは代金上納
1840	天保11	斉護	松井督之、藩主に願って紙楮会所を東宮地村辺田に置く。以後御用紙以外の紙の自由販売を禁ず
1864	元治元	慶順	原尚八先祖附、矢壁文太跡日常八先祖附

資料）熊本藩政史研究会編（1974）：『熊本藩年表稿』、熊本県（1981）：『手漉和紙調査報告書』、『鹿北町史』、『八代宮地の手漉紙史』などより作成

き集団の存在が、八代地方の紙業を特徴づけている。

なお、ここでは詳しく触れないが、上益城・下益城地方の和紙業は、1768年（明和5）に砥用手永福良村、粟津留村の農民が、半紙の漉方を願ひ出ていることから、これ以前に成立していたことになる。しかし、盛んになるのは明治維新前後に、筑後から紙漉職人が移住してきてからのことである。人吉にも藩政期に相良藩の御用紙漉が存在したが、これも筑後八女の漉師が招聘されて生産に携わったものである。さらに、芦北地方の紙業は、八代宮地の技術が伝わったものとみられている¹⁷⁾。

2 楮・紙の統制と産地の性格

近世に各藩のとった製紙の保護・専売の強引な仕法は、和紙を品種や品質においてよりも、むしろ量において発展させたといわれるが¹⁸⁾、城北の和紙業もこうしたなかで産地の形成・拡大がすすんでいったものと思われる。

肥後藩の紙楮方による統制は、延享（1744～1748）の頃とみられており¹⁹⁾、この時代をはさんだ前後の、宝永（1704～1711）や宝暦年間（1751～1764）に、紙の他出禁止や他所売りを厳しく禁じている。各藩で抄製された紙は、原則としてまず、領内の需要を満たすことに向けられるが、その次には藩の財政を強固にする手段として使われるため、領内の消費を厳しくおさえ、能うかぎり商品として全国市場に売り出すことになる²⁰⁾。第1表からみる限り、肥後藩では宝永年間頃まで紙が不足がちであったが、その後は上述したように、紙・楮の他所売りを禁じ、厳しい統制下においている。享保（1716～1736）以降、農民の没落、人口の減少、農村の荒廃が著しく、同時に藩財政は困窮し、細川家は上方商人からの借財を踏み倒すことで有名であったとまでいわれているが²¹⁾、細川重賢による宝暦の改革も、その主たる課題は農村の再建、藩財政の立て直しにあった。楮・蠟の専売も、このなかで、紙・楮以上に課題克服の重要な手段として計画されている。

それでは、こうした藩の厳しい統制のなかでの和紙業の生産・流通というものは、いったいどのようなものだったのだろうか。本田秀人²²⁾によると、1813年（文化10）～1822年（文政5）にかけて城北の山十町村（現玉名郡三加和町）では、御用紙の生産高は宇田紙のうち、六寸八切が最も多く、次に極上が続く。これらが上納数の大半を占めていた。肥後藩は大坂に紙を取用する「肥後山鹿蔵」を所有していたが²³⁾、山十町村の御用紙は、荷駄によって山鹿に持ち込まれ、そこから陸路で楯方に運ばれている。なかには川尻まで輸送されたものもあった。また、山鹿紙楮会所から津口で運上りが徴収されることなく、廻船問屋によって紙問屋へ積廻されている。1792年（寛政4）の御仕法替り直後には、切延、延形、場形、薄巻紙などが生産されていたようで、化政期の城北地方は、和紙の重要な産地だったことが分かる。

ところで、これは肥後だけに限ったことではないが、紙・楮の統制・専売が強力に実施されたところでは、それが弛緩した後に衰微していく産地が多い。磯部喜一は²⁴⁾、明治初期の衰退産地の代表的な例として伊予の大洲・宇和地方をあげ、こうした産地の性格は、専門的な生産者や有力商人は成長せず、生産形態も農閑期の副業としておこなわれていた場合が多く、生産者の規模拡大や商業化の傾向も著しくないと指摘している。熊本の和紙産地の性格も、まさにこれら産地との類似型と解されよう。ただ、熊本の近代以降の産業のあり方を考える場合、肥後藩には他の藩にあまり例をみない地方行政制度として、五ヶ町の制や手永・惣庄屋制度、横目制度などがあり、一般的な理解以外に肥後藩特有の歴史的側面を十分に考慮することも必要である。とくに「五ヶ町の制」は、商品経済の農村への浸透を防遏する行政手段として考えだされたもので、城下町熊本の他、八代・川尻・高瀬・高橋の五ヶ町を指定し、行政・経済・文化の面で特権を認めた制度である²⁵⁾。高瀬・川尻・八代は三津端と称し、1860年（延宝8）

には御蔵が新設され、俵物一切がここに集荷され、大坂に船積みされている²⁶⁾。この制度は、在郷資本の蓄積を押さえ、同時に都市の商業資本を藩に従属することに狙いをおいたものであったが、これによって藩内の都市商業資本は寄生的性格を強め²⁷⁾、明治以降の産業近代化への取り組みにも少なからず影響を及ぼしていくことになる。

さらに磯部は、伊予の宇摩郡地方を産地としてとらえ、この産地の性格は、開明的な商人が輩出し、積極的な技術の導入や業界の統一、販路の開拓など、産地の活発な諸活動にみられるとしている。本稿で比較・対照としてとりあげた筑後和紙産地は、この視点からみると、宇摩郡と同様の産地型として理解できよう。久留米藩は、当初柳河藩によって与えられた御用紙の紙漉工に対する特権を続けて与えている。しかし、柳河藩が製紙に対して示した程の関心は示さなかったようで、幕末頃には筑後では、単に御用紙の抄造だけにとどまらず、民需に対する生産も相当に伸び、問屋など商業資本の集積も福島町を中心に芽生えつつあった²⁸⁾。

幕末から明治期にかけての筑後和紙産地の発展は、城北地方との地域関係を次第に強め、城北和紙産地の変容に深くかかわってくることになる。

III 城北地方の和紙業

1 明治前期の和紙業

明治の早い時期における和紙業の実態を把握するため、『明治七年府県物産表』から第2表を作成した。『物産表』の利用には留意すべき点はあるが、和紙業に関していえば、生産量や産額などは比較の実態に近い数値が記載されているのではなかろうか。

そこで、城北地方について述べる前に、これをもとに白川県（肥後国）の和紙生産の実態を、三瀧県（筑後国）との比較において検討をしてみた。第2表によると、肥後の和紙生産の中心は半紙で、生産額は5万204円と全体の53.7%を占めている。次いで漉返紙の生産が産額全体の20.5%に当たり、奉書と美濃紙がこれに続いている。ここに採録された品目構成をみると、生産額の多かった半紙、漉返紙などは伝統的な日常の品であるし、その他のものも大半は肥後国内の需要に充てられたものである。勿論、『物産表』だけから、そこまで言い切ることはいないが、できるだけこれに近い時期の『熊本県統計書』（1881年、明治14）をみるとほぼ見当がつく。これには、この年の熊本県における紙類の生産量は26万3,955斤、生産額7,011円66銭8厘となって

第2表 白川県・三瀧県における和紙生産

白川県（肥後国）				三瀧県（筑後国）			
種 類	生産量	生産額	同比率	種 類	生産量	生産額	同比率
	束	円	%		束	円	%
奉 書	722	9,031	9.7	広 形 紙	32,250	27,450	22.5
美 濃 紙	16,300	8,900	9.5	色 紙	2,000	320	0.3
半 紙	194,260	50,204	53.7	奉 書 紙	1,500	1,250	1.0
雁 皮 紙	2,770	512	0.5	美 濃 紙	3,600	1,940	1.6
染 地 紙	1,500	180	0.2	中 結 紙	194,500	45,145	37.0
ウ ダ 紙	5,000	5,500	5.9	百 田 紙	27,034	7,408.5	6.0
漉 返 紙	104,200	19,140	20.5	半 切 紙	25,460	20,592	16.9
				漉 返 紙	8,000	400	0.3
				傘 紙	27,000	17,550	14.4
計	—	93,467	100.0	計	—	122,055.5	100.0

資料) 明治文献資料刊行会(1966):『明治前期産業発達史資料』(第1集, 2)所収,「明治七年府県物産表」より作成。

いる。そして、海路輸出品の項目に紙類 4 個 (114 円 10 銭) との記載がある。しかし、陸路輸出品の項目には、楮皮があっても紙類の記載はなく、逆に輸入品の箇所に紙類が海路で 55 個 (1,644 円 86 銭 5 厘)、陸路で 877 斤 (2 万 6,366 円) と記されている。つまり、県外からの紙の移入はあっても、熊本産の紙が県外に移出されることは少なく、県内の紙の殆んどが地元の小市場を対象にした生産であったことになる。

これに対し、筑後国では中結紙、広形紙 (後の東洋紙)、半切紙、傘紙などが生産量の多い品目としてあげられており、これだけで全産額の 90.8 % を占めている。これ以外にも色紙、奉書紙、美濃紙、百田紙、漉返紙などがあるが、これらは量・産額ともに少ない。傘紙は、とくに筑後農村において農家家内工業が発展していくなかで、生産を伸ばしてきたものである。また、「からゆき」とも称され壁紙や襖張・包装・裁縫用などに広く使用された広形紙は、中国市場にまで販路を拡大し、産地の形成・拡大に大きな役割を果たしている。『福岡縣八女郡是』(1899 年) は、広形紙の出現と中国市場進出の様子を、「海外ニ於ケル販路ハ本郡福島町江下伊平ノ亡祖父ノ開始ニ係レリ抑モ今ノ江下伊平ノ亡祖父江下伊平ハ文政六年頃ヨリ製紙ノ販賣業ニ従事セシカ嘉永七年廣形紙 (今ノ東洋紙) ノ抄造法ヲ發明シ長崎ニ於テ清國商人豊記號ト之レカ取引ヲ開始セシ」と記している。こうしてみると、筑後では幕末から明治前期にかけて、紙商人によって新たな製品が創製され、地方小市場だけでなく、販路を海外にまで広げている。商人資本と技術の集積が、新たに輸出商品を創出し、これが新市場の開拓に実を結んだことで、筑後和紙産地の基盤はより強固なものとなっていった。

肥後・筑後の和紙業の比較では、肥後は半紙を中心とした日用品で地方市場、筑後は輸出商品、特殊紙で地方・海外市場という特徴が浮かびあがる。

2 城北の和紙業地域

明治前期の旧村ごとの紙漉戸数や和紙の生産量を詳しく知ることのできる資料に『郡村誌』がある。本田秀人は、1882 年 (明治 15) の残存する『郡村誌』をもとに、郡別の和紙生産量・紙漉戸数を調べている²⁹⁾。これによると、八代、芦北、天草などの状況は分からないが、紙漉戸数では玉名 488、山鹿 71、下益城 32、上益城 31、飽田 10、宇土 3、山本・菊池が各 1 となっている。熊本、託麻、合志、阿蘇には戸数の記載はない。これだけから判断すると、玉名・山鹿・山本・菊池の城北 4 郡のうち、玉名・山鹿に 559 戸の紙漉業者が存在していたことになり、著しく集中していたことになる。

次に、和紙の生産量をこの 2 郡についてみると、玉名郡は往来紙 3,080 束、延形紙 320 束、場形紙 18,340 束、小紙 24,100 束、塵紙 7,300 束、漉紙 488 束となっている。山鹿郡は切延紙 3,530 束、延形紙 200 束、場形紙 1,770 束、小紙 5,000 束、半紙 50 束、元結紙 4,500 束、傘紙 6,000 束、団扇紙 550 束、提灯紙 400 束とある。この結果、城北の和紙業地域においては、明治 10 年代には切延、延形、場形、小紙などが広く生産されていたといえる。また、この他に玉名郡では往来紙や塵紙、山鹿郡では元結紙や傘紙、それに量こそ少ないが団扇紙や提灯紙も抄紙されている。延形、切延、場形などの紙は、既に 1792 年 (寛政 4) 頃の御用紙として名前が出ていることから³⁰⁾、この地域の紙は、品目のうえで、藩政期以来大きな変化がなかったことになる。ただ、山鹿では上述したように傘紙、団扇紙、提灯紙など、農家家内工業の発達とともに、それらに供給すべき紙の生産がみられる。山鹿郡の山鹿町 (現山鹿市) では、天保年間 (1830～1844) に和傘の製造が始められているし、団扇も来民町 (現鹿本町来民) が生産の中心であった。『山鹿郡村誌』の「物産」の項には、「団扇百万本」、「団扇職 70 戸」の記載がある。

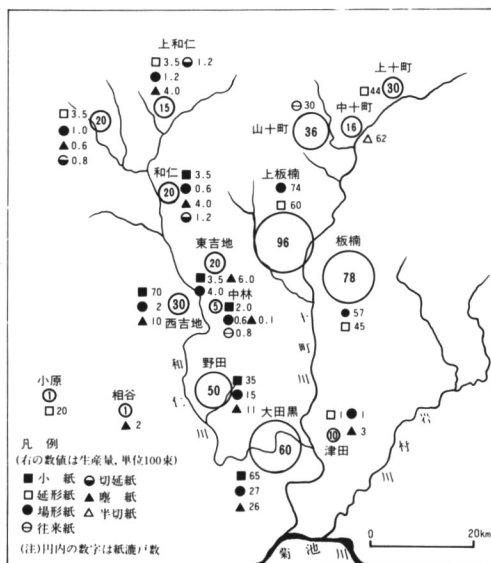
こうした城北の和紙業地域のなかであって、菊池川の平野が広がる南部の山本 (後の鹿本郡)・菊池の

2 郡では、わずかに場形紙を各 50 束とそれに菊池では小紙を 36 束産するだけで、和紙業の退潮は著しい。この頃、平地の農村においては、農家余業として木綿織や養蚕が広汎におこなわれており、とりわけ養蚕業の伸長は目覚しかった。この間の状況を『山鹿郡村誌』の「民業」の項についてみてみると、菊池川とその支流の内田川沿いの村々（現鹿本郡鹿本町）のうち、津袋と石渕村では、「余暇布、木綿ヲ製ス」とある。来民村では、「余暇茶ヲ製シ、或ハ養蚕ヲナス」、梶尾村については、「余暇茶或ハ木綿ヲ製シ、養蚕ヲナス」と記されている、

このようにみてくると、明治 10 年代(1878~1887)の城北地方の和紙業は、維新以後大きな発展をみることもなく、藩政期以来の伝統的な在来紙の生産を維持・継続し、きわめて停滞的な産地として存続していたといえる。そのなかで、量的にはわずかであるが、農家内工業の展開によって、傘紙や団扇・提灯紙などを産し、品目も多様化の方向に向うが、これも同一地域内の小市場を指向したものであって、けっして産地の発展につながるものではなかった。また、菊池川流域の平野部では、養蚕業の拡大がすすむなか、和紙業は姿を消そうとしている。城北の和紙地域は、生産地域を縮小しながら、次第に北部の山間地にその中心を形成していった。

そこで、次に和紙業地域のなかを詳しく知るために、『玉名郡村誌』³¹⁾から第 2 図を作成した。この図によると、和仁川下流の谷から西へ少し寄った小原村と相谷村は、延形紙と塵紙が漉かれているが、2 村とも紙漉戸数は 1 戸しかなく消滅寸前にある。紙漉戸数の多い村は、十町川流域の上板楠村、板楠村と和仁川流域の野田村、それに十町川と和仁川の合流点近くの大田黒村である。その他の村々は、ほぼ 20~30 戸程度の紙漉戸数を有している。これから明らかのように、城北の和紙産地は十町川沿いの上板楠・板楠村や和仁川沿いの野田村、両河川の合流近くの大田黒村などで、それぞれ中心をなしていたと

いえる。また十町川の上流に位置する上十町村では、延形紙、中十町村では半切紙、山十町村では往来紙が抄造され、上流のこれら村々は特定の銘柄に特化した紙漉地を形成する。そこで、紙の種類をみれば、上板楠・板楠村や野田村、大田黒村などでは、ともに場形紙を産するが、上板楠・板楠村はこれに延形紙を加え、野田・大田黒村は小紙、塵紙も生産している。こうした傾向をみると、大田黒から野田を経て上和仁・中和仁村へと至る和仁川沿いの地域は、塵紙を共通の品目としながらも、生産品目が多種にわたっている。当時、この流域がどこを販路としていたかの詳細は分らないが、恐らく地元の市場以外は、筑後が最も近接した有力な市場であったろう。矢部谷峠の先は筑後の福島町（現八女市）に通じており、紙商・紙仲買商やあるいは直接生産者の手を介した結びつきが考えられる。同じ日常用の紙を生産するにしても、品目構成の多いことは、それだけこの流域の前向きな市場へのとり組みのあらわれでもある。その意味で、十町川上流の上・中・山十町の村々は、最も伝統的な品目に固執した紙漉村であ



第 2 図 玉名郡における和紙産地と種類別生産量(1878 年)
 資料)『肥後国玉名郡村誌』(圭室諦成・田辺哲夫, 玉名民報社刊, 1958 年)より作成

る。ここは猿懸峠を越えても、福島町とはやや距離をおいている。

ところで、第2図によると、紙漉きの盛んな村は、必ずしも山間部でも奥深い上流部に位置しているとは限らない。第3図は玉名郡における旧村ごとの楮皮生産量(100貫以下は除く)の分布を示したものであるが、大量の楮皮生産地と和紙産地との一致がみられる。この時代、原料楮の存在が和紙業の立地や産地を形成するうえで重要な要件であったことをよく示している。

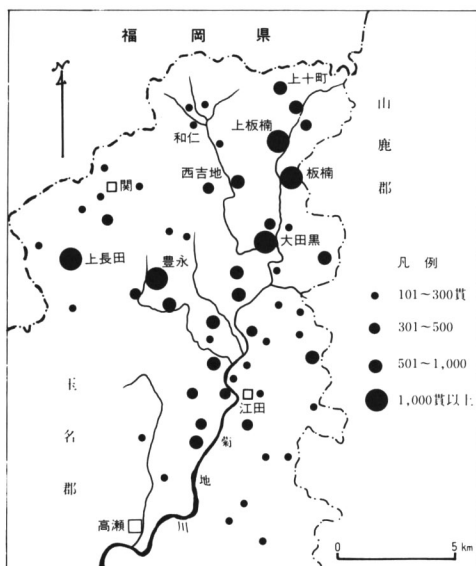
3 養蚕業の発達と和紙業の衰退

『郡村誌』以後の城北和紙業地域の状況を知る資料は今のところなく、断片的な資料に頼らざるを得なかった。そこで、熊本県立図書館所蔵の県政資料のなかから、『巡視員復命書』³²⁾(1895年)の記録をみると、「實地の概況」の項のうち、「町村全体ノ状況」を記す欄には、1894年(明治27)6月から8月にかけて、和紙業の中心地である緑村、春富村を巡視した状況が報告されている。この2つの村は現在玉名郡三加和町に属しているが、その範囲は第2図に示

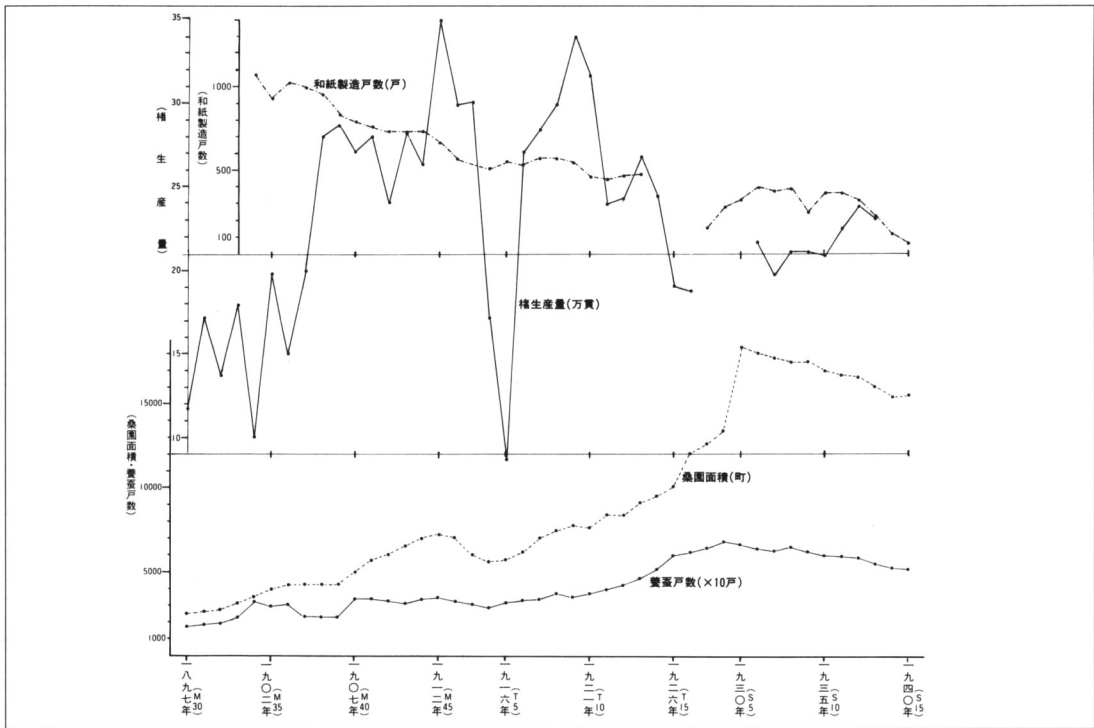
した城北の和紙業地域(旧小原・相谷村を除く)に当たっている。そこには、「農業ノ傍製紙業者アルモ振ハス」と記述されてあって、和紙業の不振が報告されている。その一方で、これらの村に隣接する神尾村の南で、菊池川右岸に位置する川沿村(現玉名郡菊水町)については、「大字江栗ニハ養蚕最モ盛ニシテ製糸場之設ケアリ」と報告している。江栗には1893年(明治26)に私立製糸伝習所も設立されている。これより、明治20年代(1888~1897)後半には、山間地における農家副業型の零細な和紙業の不振と平場農村における養蚕・製糸業の隆盛がうかがわれる。

熊本県の養蚕業は、宝暦の改革のなかで桑の栽植や蚕飼いが奨励されていくが、本格的な発展は明治期に入ってからで、生糸が輸出品として重要視されるようになりだしてからである。1872年(明治5)には、9ヶ所に県営の養蚕試験場を設けたり、1881年(明治14)には、県が桑苗・蚕種を配布し、翌年には蚕種講習所も設立している³³⁾。このような努力の結果、1887年(明治20)頃を画期に養蚕業は興隆に向い、1897年(明治30)頃には顕著な発展をみるまでになっている。

わが国では、日露戦争後から第一次大戦勃発までの期間、不況とそれによる米価の下落で、養蚕業の急速な進展をみている。熊本県でも、第4図から明らかなように、この頃桑園面積・養蚕戸数ともに従前以上の増加をみせている。とくに桑園面積は大幅な拡大傾向を示すが、これとは逆に、和紙製造戸数は減少に傾いている。『玉名郡是』(1903年)は、製糸業について、「皆農家ノ副業ナリ近年蠶業著シク進歩シ蠶業家各家坐繰製糸ヲナス者増加セリ」と記す。また、和紙業については「神尾、緑、春富各地ノ製紙業者僅カニ其命脈ヲ繋留シ僅カニ地方ノ需要に充テツツアリ」と述べ、後退一途の姿を浮き彫りにしている。『郡是』は、さらに「本郡内ニハ古來緑村ニ四百戸以上春富村ニ二百五十戸余神尾村ニ二百戸以



第3図 玉名郡における旧村別楮皮生産量(1878年)
資料)『肥後国玉名郡村誌』より作成



第4図 養蚕業・和紙製造業関連の戸数・生産量・面積の推移 (1897～1940)

資料)『熊本県統計書』『熊本県蚕糸業史』より作成

上ノ製糸業者アリテ往時ハ多数ノ抄出アリ農業ノ副業ト云ハンヨリ寧ロ主業ト云フヘキ盛況ナリシモ近年大ニ製造家ヲ減シ現今緑村三百五十六戸春富村九十五戸神尾村六十戸ニ減少シ是等製造家モ抄出高甚タ少額トナレリ」と記載する。「古來」とは何時の頃なのか判然としないが、これをみる限り、緑村の紙漉戸数の減少は比較的少なく、他の2村の減少数が大きい。

わが国の和紙生産は、生産額のうで1897年から1901年(明治34)頃にかけて一つのピークが認められるが³⁴⁾、城北地域はこの時期には、既に衰退の歩を早め、上述した日露戦争から第一次大戦までの期間には、一層顕著に進行している。しかし、こうした動きのなかで、第4図の楮皮生産の動向に目をやると、年ごとの変動はみられても、大勢として拡大の方向に向っている。城北の和紙産地は、この頃を転

機として、楮皮生産が次第に重きをなしてきたといえる。

ところで、福岡県の筑後和紙産地では、1898年(明治31)に視察員を高知、福井、岐阜などの先進産地に派遣したり、製紙伝習所の設置を図るなど、産地発展の対策がとられている。1899年には、前年の「重要輸出品同業組合法」の公布をうけて、「筑後和紙同業組合」を組織し、産地の組織化にも成功している。さらに、1901年には巡回教師を常設し、改良製紙法を教授するなど、新たな技術の習得や普及にも多大の努力が払われている。製造戸数をみても、1901年には1,366戸であったものが、1907年(明治40)には1,618戸を数え、これまでの最高に達している。生産品目も1898年は半紙、東洋紙、百田紙、半切紙、障子紙などの産額が多かったが、1906年(明治39)頃には東洋紙、京花紙などの輸出ものや広域市場も

のが増え、半紙、百田紙、障子紙などの地方市場向けの品目が生産量・産額ともに減少し、品目の多様化や製品の特殊化がすすんでいる（第3表）。ただ、京花紙は純楮製の薄紙で、化粧用や包装用などに広く使用されていたが、九州市場から東京市場に進出するのは1923年のことである。それにしても、東洋紙の生産拡大と地元紙商の手になる京花紙の出現は、一段と産地の発展を促した³⁵⁾。

そこで、再び城北地方に目を向けると、『玉名郡是』は、「近年他府縣ノ製紙紙質ヲ改良セシニ拘ハラス邊陲ノ寒村世運ノ進歩ニ伴フ能ハス舊來ノ抄造法ヲ採

守シテ改善ノ運ヲ講セス遂ニ他府縣改良製紙ノ為メニ凌駕セラレ販路杜絶利益減縮ノ為メ漸次衰運ニ陥リシニ外ナラス」と述べ、既に城北の和紙産地にとっては、原料楮の存在は、紙業経営のうえでそれほど重要ではなく、それ以上に新たな市場の開拓や技術の改良、新製品の創出の有無が、産地存続にとって大切な条件になってきていることを示唆している。

熊本県は、1901年に製紙振興策として、高知県から製紙教師を招き、玉名郡緑村をはじめ各村で技術の指導・伝習をおこなっている。1901年といえば、

第3表 福岡県八女郡における種類別和紙生産量・生産額

種 類	1898 (明治31) 年			1904 (明治37)～1906 (明治39) 年平均			
	生産量	生産額	同比率	製造戸数	生産量	生産額	同比率
美濃紙	13,505束	9,341円	2.1%	12	6,918束	7,056円	1.2%
百田紙	128,720	64,125	14.1	148	132,370	66,185	10.7
半紙	456,800	150,047	33.1	193	235,089	84,632	13.7
半切紙	85,502	32,752	7.2	17	12,164	6,463	1.1
溝口紙	4,260	1,320	0.3	4	6,600	3,630	0.6
障子紙	42,081	17,777	3.9	45	26,452	29,097	4.7
清長紙	4,616	3,079	0.7	30	2,730	2,184	0.4
和唐紙	540	756	0.2	6	3,730	4,995	0.8
東洋紙	60,390締	104,969	23.1	231	71,812締	150,805	24.5
典具帖紙	2,151束	1,835	0.4	16	2,420束	4,114	0.7
油引紙	650	239	0.0		—	—	
京花紙	12,600	1,008	0.2	126	483,272	120,818	19.6
千代紙	340	612	0.1	5	275	1,485	0.2
杉原紙	10,285	2,880	0.6	3	1,956	3,912	0.6
奉書紙	2,625	1,616	0.4	3	1,960	4,312	0.7
斗袋紙	10,090	4,036	0.9	11	2,165	6,733	1.1
傘紙	10,478	6,127	1.4	29	14,990	22,485	3.6
十文字紙	8,180	2,682	0.6	3	1,000	550	0.1
元結紙	21,490	13,410	3.0	18	4,000	13,120	2.1
表紙	450	212	0.0	4	400	320	0.1
陶器紙	600	360	0.1	3	300	450	0.1
雑紙	584,671	34,451	7.6	222	515,132	61,816	10.1
塵紙	—	—		34	106,950	5,134	0.8
千年紙	—	—		12	90	2,070	0.3
西ノ内紙	—	—		2	250	425	0.1
小半紙	—	—		17	48,500	12,610	2.0
七夕紙	—	—		2	6,000	1,020	0.2
計		453,634	100.0	1,196		616,412	100.0

資料) 八女郡役所 (1911):『第2回福岡縣八女郡是』より作成

わが国の和紙生産戸数が68,562戸を数え、これまでの最高を示した年である。しかし、こうした努力も期待した成果を生むことなく終わっている。城北地方の和紙産地は、新たな時代の動勢に積極的に取り組み、産地の発展につなげていくような活力を期待することすら酷なまでに衰退していた。

西沢弘順は、土佐和紙業内部に市場構造の変化とそれに対応する生産者商人間の競争をめぐって、(山村型→副業的零細生産者——半紙を中心とする日用商品)と(平場型→マニファクチュア——改良紙、特種紙——国内市場及び外需)の2つの系列が生み出されてきた点を指摘している³⁶⁾。この類型は、そのまま城北和紙業と筑後和紙業の産地にもあてはまる。とくに山村型の和紙産地は、土佐では明治30年代以後に急速に進行する洋紙との競合や機械漉和紙によって次第に衰退し、大正末から昭和初期の恐慌の過程で潰滅していくが、城北地方はこれまでに述べてきたように、もっと早い時期に起こっている。

IV 和紙業地域の変容

1 産地の生産・流通構造

手漉き和紙は、一般に伝統的な技法や紙質を大事にするところから、生産体系のなかで分業の形態をとっておこなうことに自ずと限界がある。それでも、筑後では第4表に示すように、1907年頃には、糞藁、糞楮や紙断、紙漉職などの専門の業者・職人が生まれているし、原料・流通部門でも楮皮商、紙商、仲買人などが多く輩出している。これに比べて、城北の玉名郡では、1901年当時紙商や原料商は存在しても、生産部門において紙漉5人の他には専門の業者や仲買人の存在は認められない。城北の和紙業は、これからみても零細な農家副業型産地の構造を端的にあらわしている。これに対し、筑後和紙業にみる分業の発達、発展的産地の構造として、先の土佐和紙業における平場型産地の類似型として理解できよう。

第4表 玉名郡(熊本県)と八女郡(福岡県)における和紙業関連業者

種 類		玉名郡 (1901 年)	八女郡 (1907 年)
		戸数・人数	戸数・人数
工業	製 造 戸 数	511 戸	1,196 戸
	糞 藁		8 戸
	糞 楮		2 戸
	紙 漉 職		5 戸
商業	紙 商	15 戸	(36 戸)76 戸
	楮 皮 商	29 戸	(65 戸)65 戸
雑商	紙 買 出 仲 買		73 戸
	楮 皮 買 出 仲 買		7 戸
雑業	紙 断 職		27 人
	紙 漉	5 人	11 人

注1) 玉名郡は楮藁商

注2) 八女郡の紙商の()内戸数は1898年(明治31)のもの資料)『玉名郡是』、『第2回福岡県八女郡是』より作成

ところで、九州では先進的な産地といわれる筑後も、紙商による産地の支配力はけっして強いものではなかった。『八女郡是』は、1898年の紙の産額を45万3,636円、販売額を56万7,040円と算出するが、このうち紙商の取扱高は29万7,290円であり、これは販売額全体の52.4%にすぎない。『八女郡是』が、「本郡製紙業ノ多クハ農事ノ余業ナリ」というように、農村の小生産者によって生産された紙は、消費者に直接売られる場合が多い。また、紙買出仲買商も戸数こそ73戸と紙商より少ないが、第2回の『八女郡是』から彼らの活動資金をみると、8万3,499円にのぼり、紙商の7万9,555円を上回っている。

次に、原料の楮皮についてみても、八女郡では1898年当時、117万1,300斤を産していたが、消費額はそれを上回る225万5,742斤であった。不足分は大分、熊本、県内各地などから仕入れているが、このうち楮皮商人の取り扱い額は6万6,917円(66.9%)しかなく、残りの約3分の1は商人の手を介さないで供給されていたことになる。筑後では、明治20年代の中頃は、まだ熊本県の鹿本郡地方の農

民たちが黒皮を牛馬に担荷して、福島町近傍の手漉業者に直接販売にきていたといわれている。原料の集荷と加工業を兼ねた原料取扱業者も存在せず、原料取引は楮栽培農家と手漉業者との直接取引か、あるいは日用品等の行商兼楮取扱商に販売(物々交換)するかいずれかであった³⁷⁾。原料商の出現は明治30年代に入ってからのものであろう。第4表には、楮皮商として7戸の存在が示されている。

ところで第4表をもとに、城北の和紙産地についてももう少し深く検討を加えてみよう。玉名郡には紙製造戸数511戸、紙商15戸、楮皮商(楮廬商)29戸で、専業の紙漉職も5人存在していた。このうち、楮廬商と紙商について『玉名郡是』をもとに検討すると、当時の楮廬商の商収益は、固定資本78円50銭、流通資本2,290円、回転総資本6,550円、利益966円30銭となっている。紙商については、固定資本38円、流通資本206円、回転総資本3,120円、利益210円70銭であった。玉名郡では紙商よりも原料商の方が数も多く、また商活動も活発であったといえる。このことは、城北の和紙産地は、製紙以上に原料楮の生産地としての性格が強くなりつつあったことを示している。『郡是』は、さらに玉名郡の楮皮生産戸数4,109戸、生産量9万6,969貫(1万9,792円)とし、消費量1万8,020貫(7,421円)と見積っている。郡内の楮消費量は生産量の僅か18.6%にすぎないことからこの点は頷けよう。

『熊本県統計書』(1897年)によると、県内の楮皮生産量は22万8,554貫(6万4,075円)で、その移出先として大阪、福岡、佐賀、大分、宮崎をあげている。一方、紙類は11万2,600束(4万5,773円)を大阪、佐賀、福岡に移出しているが、大阪、高知、福岡、大分、長崎、広島、宮崎などからは、17万9,179束(6万929円)もの紙類が移入されている。これは県全体の状況であるが、いずれにしても紙の市場は、九州の近県や隣接県に限られ、移出量以上の紙が大阪をはじめ福岡県や先進産地の高知県などから移入

されている。

2 和紙産地から原料産地へ

筑後和紙の産地形成がすすんだ明治30年代には、筑後農村にそれまで存在しなかった原料商があらわれている。とくに、明治末期頃には相当の資力を持った6名程の原料商の存在が確認されている。彼らの前職は金貸業、茶商などであるが、1919年以降の紙業恐慌期まで産地を支配している³⁸⁾。一方、『熊本県農事調査』³⁹⁾をみても、「仲買人産地ニ入込ミ之レヲ買取り或ハ産地ヨリ各所ニ輸出ス縣下製紙業者ノ需要ニ剰余アル分ハ凡テ福岡佐賀地方ノ製紙原料ニ輸出スル」との記述がなされており、原料仲買商が産地に出入りしていたことを示している。

ところで、城北地方の楮は、朝鮮楮とも紅楮とも称され、繊維が短かく強靱なことが大きな特徴となっている。この性質は、筑後和紙の紙質を特徴づけ、個性的な味わいを最大限に出すうえでなくてはならないもので、筑後の手漉和紙業者にとっては「城北のもの」と呼んで他の産地ものに代えることのできない重要な原料である。筑後和紙産地の進展は、同時に城北地方の楮皮生産が大きく伸展した時期でもあった。玉名・鹿本・菊池3郡の楮皮生産は、第5表に示すように飛躍的に増加している。

その後、平場の農村に産地の中心をおく筑後では、農業生産面で、次第に商品作物生産の発展がみられ、新規作物と楮栽培との間で、競合が生じている。その結果、楮生産は次第に山間地へと押しやられ、この影響もあって城北地方の原料生産の比重が増してきたのは明らかである。大正期の九州各県における楮生産の推移(第6表)をみても、福岡県は生産量を著しく減じており、逆に熊本県は年ごとに比重を増している。

原料取引の実態は、明治末頃については詳らかでないが、昭和20年代は原料商が(1)木楮をそのまま購入したり、(2)農事組合を単位として購入したり、(3)産地の加工者を介したり、(4)農協を経由しての

第5表 熊本県における楮皮生産量の市郡別構成比

	1899 年	1901 年	1905 年	1909 年
	%	%	%	%
熊 本	—	—	—	—
飽 託	0.1	1.5	0.1	0.2
宇 土	—	—	—	—
玉 名	8.2	19.1	3.5	17.7
鹿 本	4.3	11.5	39.0	19.6
菊 池	5.0	6.1	5.8	11.3
阿 蘇	11.1	10.1	15.5	8.3
上益城	0.3	3.3	1.7	3.0
下益城	9.6	27.8	5.7	5.9
八 代	18.4	8.5	4.5	3.1
葎 北	13.8	9.6	7.5	6.3
球 磨	28.7	2.4	16.7	24.5
天 草	0.5	—	—	—
計	100.0 136,833 貫	100.0 103,776 貫	100.0 278,841 貫	100.0 239,462 貫

資料)『熊本県統計書』より作成

購入法などがあった。このうち、熊本県に最も多くみられたのは、(3)の方法である。これは比較的豊かな中・富農が、予め栽培農家から木楮を買い入れ、農閑期(12～3月頃)に黒皮加工をおこない、原料商がこれを買取る方法である⁴⁰⁾。(1)の木楮をそのまま購入する形態や(3)の原料取引の形態は、明治末頃にも一般的に存在したことであろう。それは第4表からも分るように、八女郡に荑楮業者5戸の存在が

確認されていることからもうかがえる。

以上から、城北地方の原料楮生産は、木楮生産や中・富農層を中心とした黒皮加工が一般におこなわれていたといえる。

V お わ り に

熊本の和紙業は、地場の原料楮と移植した抄紙技術とによって成立し、藩政期には肥後藩による奨励と強力な楮・紙の統制下で地域的な展開をみたといえる。その結果、和紙業は原料を大量に生産する地域を中心に産地の形成がすすみ、城北地方はそんな中でも主要な産地の一つであった。この地方では、御蔵紙の他に領国内で消費される日常紙の生産が主流で、八代宮地にみられた紙漉集団の手になる「お留紙」生産とは異なり、高度な技術的発展や品目の多様化などの傾向は殆んどみられなかった。

維新後も城北地方の紙漉きは、技術的停滞と生産品目に大きな変化をみないまま、零細な農家副業の形態をとって存続した。それでもまだ、明治の早い時期においては、大量の原料楮の存在は産地にとっては有利な条件として働いた。しかし、明治20年代以降の養蚕業の著しい進展、30年代以降の洋紙の普及と機械和紙の出現、産地間競争の激化など、伝統

第6表 九州における県別楮生産量の推移

単位：貫

	1919 年		1930 年		1940 年		1946 年	
		%		%		%		%
福 岡	456,053	25.0	149,197	16.5	127,846	13.1	51,441	17.5
※(八女郡)	(342,090)	(76.0)	(132,299)	(88.7)	(101,920)	(79.7)	(15,550)	(30.2)
佐 賀	322,358	17.7	195,793	21.7	256,494	26.3	80,755	27.5
長 崎	21,128	1.1	16,416	1.8	19,786	2.0	1,200	0.4
熊 本	293,326	16.1	194,166	21.5	217,987	22.4	79,135	27.0
大 分	239,677	13.1	68,812	7.6	59,664	6.1	17,761	6.1
宮 崎	278,683	15.3	110,441	12.2	69,512	7.1	19,233	6.6
鹿 児 島	213,674	11.7	168,898	18.7	222,919	22.9	43,637	14.9
計	1,824,899	100.0	903,723	100.0	974,208	100.0	293,162	100.0

注) ※印の()内の数字は、八女郡の生産量と福岡県における比率

資料)『筑後和紙産地診断調査書』p.113の第4表より作成

的な和紙業にとって、こうした一連の状況変化は、市場や技術・資本以上に原料資源に依存する傾向の強い産地を窮地に追いやっている。この時期には、新たな市場の開拓、技術の改良、新製品の創出など、これら実現の可否が産地発展の重要な条件となってくる。しかし、(山村型——副業的零細生産者——半紙を中心とした日用品生産)という産地類型として理解される城北和紙産地にとって、これ以上の発展を期待することは無理であった。この頃には、熊本県は隣接の福岡県や先進産地の高知県などから、良質の紙を大量に移入している。これなど地方衰退産地の脆弱さを最も端的に示す現象といえる。

明治30年代以降の急速な和紙業の後退で、城北地方の和紙産地は次第に原料楮の産地へと性格を変えていくことになるが、これは、隣接する筑後和紙産地の発展・拡大という、多分に他律的な条件に支配されてのことであった。筑後和紙産地にとって、「城北もの」と称する原料楮(紅楮)は、強靱な筑後和紙の特徴を表現する重要な原料で、他産地ものに代えることのできないものである。本来、豊富な原料基盤に成立した城北の和紙産地は、明治期の後半には地元楮の特徴を生かした筑後和紙業の発展・拡大によって、次第にその原料供給地域として産地の一部に組み入れられ、結局は、原料産地へと変容をとげながら和紙業とのかかわりを維持していくことになる。

(1989年1月10日 受付)

(1989年1月24日 受理)

参考文献

- 1) 磯部喜一(1962): 和紙工業の発達. 中小企業調査会編: 『中小企業研究』(第7巻, 中小工業の発達2), 東洋経済新報社, 258.
- 2) 大脇保彦(1970): 明治期における和紙業の地域的展開について——統計資料を中心とした考察——. 人文地理, 22-3, 28~57.

- 3) 前掲書1).
- 4) 三瓶孝子(1944): 『農家内諸工業の変遷過程』伊藤書店, 33~74.
- 5) 前掲書2).
- 6) 笠井文保(1977): 和紙生産の立地と変遷(2). 農林研究, 45, 34~50.
- 7) 西沢弘順(1960): 産業資本確立期における和紙業の展開. 社会経済史学, 26-6, 59~77.
- 8) 木下昭三(1963): 五箇地方の和紙業の変遷. 自然と社会, 29・30, 2~9.
- 9) 会田隆昭(1980): 原料基盤の変化による変容——上条・小国和紙業地域——板倉勝高・北村嘉行編: 『地場産業の地域』大明堂, 136~146.
- 10) 鹿北町(1974): 『鹿北町誌』, 65~70.
- 11) 江上敏勝(1968): 『八代宮地の手漉紙史』八代市教育委員会, 28 p.
- 12) 坂田幸之助(1988): 浦田紙の源流を求めて. 玉東町史編纂ニュース, 19, 18~30.
- 13) 松本寿三郎(1988): 『玉名郡内田手永風土記』熊本近世の会, 79 p.
- 14) 本田秀人(1977): 肥後藩における製紙業について——史料紹介として——. 熊本史学, 50, 194~206.
- 15) 前掲書11).
- 16) 寿岳文章(1967): 『日本の紙』吉川弘文館, 300.
- 17) 成田漢英(1949): 『九州の和紙業』丸善出版, 17~21.
- 18) 前掲書16), 300~301.
- 19) 吉永 昭(1973): 『近世の専売制度』吉川弘文館, 317.
- 20) 前掲書16), 301.
- 21) 前掲書19), 168~169.
- 22) 前掲書14).
- 23) 前掲書16), 303~306.
- 24) 前掲書1), 259~262.
- 25) 森田誠一(1982): 『近世における在町の展開と藩政』山川出版社, 26~28.
- 26) 熊本県(1961): 『熊本県史』(近代編1), 475~478.
- 27) 森田誠一(1957): 熊本県に於ける明治期産業資本の史的性質. 熊本史学, 11, 11~21.
- 28) 久保山千里(1965): 『筑後和紙生産の推移』八女市役所, 5~6.
- 29) 前掲書14).
- 30) 前掲書14).
- 31) 圭室諦成・田辺哲夫(1958): 『肥後国玉名郡村誌』玉名民報社, 494 p.
- 32) 熊本県公文類纂2—323, 巡視員復命書, 1895年.(熊本県立図書館蔵).
- 33) 熊本県蚕糸振興協会(1980): 『熊本県蚕糸業史』89~90.

- 34) 前掲書 7).
- 35) 山中 進・田中穂積(1986): 筑後和紙生産の衰退と産地の性格. 熊本大学教養部紀要(人文・社会科学編), **21**, 75~98.
- 36) 前掲書 7).
- 37) 福岡県(1954): 『筑後和紙産地診断報告書』, 123~124.
- 38) 前掲書 37), 124~125.
- 39) 大橋 博(1980): 『明治中期産業運動資料, 第1集農事調査』日本経済評論社, **15**-3, 26.
- 40) 前掲書 37), 132~133.

Some Conditions of the Changes of Making Region in a Local Ziba Industry ——A Case Study of Handmade Paper Making Region in the Northern Part of Kumamoto Prefecture——

Susumu YAMANAKA*

Handmade paper making in Kumamoto prefecture is originated from the industrial combination of both Kajinoki (*Broussonetia Papyrifera Vent*) which is planted in this area and the special skills to make handmade paper which came from Kohrai (the ancient name of Korea) and Chikugo rural area. In Edo era, one of the Higo clan's strategies of industrial encouragement caused to develop handmade paper making in Higo district. The prosperity of handmade paper making in this district at that time brought forth a producing center of handmade paper revolving around the area where Kajinoki was planted and produced to a great extent, and Jouhoku area in Higo district turned out to be one of the most important places to make handmade paper. Handmade paper was produced here not only to offer it as the tribute to the Higo clan but also to consume it in this district.

Even in Meiji era, handmade paper making took place in Jouhoku area as a side-job of petty farmers. Hence the poor variety of handmade paper and the poor development of the skills to make it.

* Kumamoto University

Seri-culture came to be remarkably developed in 1888 to 1897 in Kumamoto prefecture. However, the traditional way of making handmade paper fell into decay to the effect that foreign paper and machine made paper have come to get a set-up in production. Moreover, good-natured paper began to be imported at that time from great cities or making region of high technology in making handmade paper like Osaka, Fukuoka, and Kouchi. Handmade paper industry in Jouhoku area came to be deteriorated in production in the second half of Meiji era, and it gradually changed its regional structure into the area of planting Kajinoki. It is because paper production of Chikugo rural area (in Fukuoka prefecture) which is contiguous to Jouhoku area developed to a great extent and it came to need Kajinoki planted in Jouhoku area in large quantities.

Thus Jouhoku area, which was once prosperous in making handmade paper in Edo era, changed itself into the rural area of only planting Kajinoki in the midst of the age of industrial revolution in Japan. It was because there was no development of the technology of making paper, no expansion of marketing, no challenge of making new products, and no attitude of taking into consideration the strategy of modern administration.